
夏影 -なつかげ- 【短編集】

ひまうさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏影 - なつかげ - 【短編集】

【Nコード】

N5917H

【作者名】

ひまつき

【あらすじ】

昭和初期の夏、日本家屋の縁側で気だるげな浴衣の女が居眠りをしている。彼女の元へ訪れるのは、悩みを持った人たちで、それを聞くのが彼女の役目。疲れたときに読む、ちょっとした清涼剤的なファンタジー短編集。

冷たい手

夏の匂いのする庭を前に縁側に座ったまま、ぼんやりと眺めていた。

そこのある庭と言わず、通り抜ける犬や猫に限らず、空を飛ぶ鳥に限らず。

ただ、世界がすべてそこに止められたような庭だ。

汗が落ちる。

耳の後ろを通り抜け、背中を通ろうとして、服に吸い込まれる。汗を吸い込んだ服は、私の背中にしがみつく。

「はーさん、はーさんっ」

パタパタと、小さな足音がかけてくる。

それを振り向かなくても、誰なのかわかる。

「今度はなに」

彼女は白地に薄青のラインが川のように入った浴衣を着ている。

帯はくしゃっとした紐を後ろでリボンみたいに結って、よく解けないものだ。

日が翳って、目の前に彼女の長い黒髪と、白い小さな顔と、黒飴みたいな目を輝かせている。

「まだ寝ちゃダメだよ。

お客さまが来たから」

「そう」

こんなところに来る客などたかが知れている。
すべて日常として組み込まれていることながら、時々どうしようもなく放棄したくなる。

このまままどろみに意識を預けてしまいたくなる。

「だーかーらー寝ちゃダメっ」

冷たい手が、触れてくる。

彼女の手はいつも冷たい。

まるで、死んでるみたいに。

「きもちいいね、手」

ひんやりとした冷たさに水の匂いが混じって、清々しい気分も一緒に運んできてくれる。

無意識なのだろうが、私には有難い。

「寝るなって言ってるのっ もー起きてよーっ」

縁側が少し離れたところで啼いた。

彼はどこか作り物めいた微笑を浮かべて、私に会釈する。

「こんにちは、葉桜さん」

あーあ、と彼女が小さく呟いた。

「待っててっていつても、聞いてくれないんだから」
「それはしかたのないことでしょうか？」

彼は真っ直ぐに歩いてきて、ぴたりと立ち止まった。

不安そうに、私を見る。

その目に私が映っていないのだとしても、子犬のようで少し可愛らしい。

何も見えない世界を彼は最初から持っていたわけじゃない。

視たくないものを見ないようにするうちに、本当に見えなくなっ
てしまったのだと聞く。

そうまでして、彼が見たくなかったものがなんなのか、私は知らない。

そういう気持ちもわからない。

「葉桜さん？」

立って、彼に近づく。

ギシリと縁側の鳴る方を見て、彼はやっと安堵の笑みを浮かべた。

「わざわざ来なくても良いって、いつもいってるでしょ」

「それだと、なかなか葉桜さんは来てくれないじゃないですか」

手をとると、彼もまた非常な冷たさを伝えてくる。

「ったく、最初はあんなに外に出るのを嫌がっていたって言うのに、
どーゆー心境の変化？」

家に閉じこもっていられるよりは良い傾向だから、自然と気持ち
が明るくなる。

「変化、ですか」

何か考え込み始めた彼の手を引いて、風通りも良い室内に案内す

る。

そのこの座椅子に座らせ、私はそのまま立ち上がるうとして、腕を引かれた。

「葉桜さん」

「なによ」

「を、好きになったことぐらいですねぇ」

にっこりと微笑む男を前に固まっではいけない。

そのまま強く腕を引かれ、体勢を大きく崩した私は、彼のひざに倒れこむ。

いったい何のつもりなのかと問い詰めようとして、やめた。

これは日常茶飯事、よくあることなのだ。

「はあ」

「いい加減、返事を聞かせてくださらないと」

「だーかーらー、そーゆー変化を言ってるわけじゃないの。

おねーさんをからかう前に、視る努力はしてる?」

彼の手が私の髪を優しく撫でる。

その手のように、優しい人だから、きつと見たくないものも多かったのかも知れないと考えることもある。

でも、何も見ないで生きられるほど世界は甘くないし、見たくないものを見ない世界にどれほどの美しさが消されてしまっつかを考えるとゾツとした。

見る、ということとは確かに怖くなることもあるかもしれない。

でも、その向こうには確かな真実があるように思うのも事実。

見えないから感じられる真実でも、見えるからこそ理解^{わか}る真実で

も、どちらも強かな美しさをも併せ持っている。

私の質問に対して、彼はいつも微笑んで言う。

「もちろんです。

はやく葉桜さんの顔が見たいですしね」

そーゆうことじゃない。

何度言っても万事この調子では、どんな名医でも彼の視力は戻らない。

必要なのは、確かに見ようとする意思なのだ。

それは恐れを知る強さとなる。

恐れを知らない強さより、恐怖を知っているからこそその強さがなによりも強く尊いものだとということを、私は知っている。

「ご褒美でもあれば、その目は視えるようになるのかしら？」

「ご褒美？」

ぴたりと、その手が止まる。

「そう、ご褒美。

たとえば、私の今日の着物の色が分かったら、キスひとつ。なーんてね」

「冗談でいうと、何も映していない瞳が大きく見開かれる。

「僕を、からかっているんですか？」

「そーじょ」

間をおかずに返すと、やっと不満そうな顔になった。

どうやったって、最後に見えればいいの。

世界が確かに強く美しいものだと感じて欲しいから、その中で、もう一度言って欲しい言葉があるから。

他の誰でもないあなたに、愛をささやいて欲しいから。

世界と私と、ねえ貴方はどっちを好きになるのかしら。

「はーさんはこいつに甘すぎっ」

隣で、彼女がその冷たい手で私を引き戻した。

冷たい手（後書き）

葉桜さんは一応医者です。精神科医？かな。彼女は助手。彼は患者。
(2004/07/26)

37・5(前書き)

信じて裏切られて、その繰り返し。

夏も終りに近づいた庭の木々は、ゆっくりと冬の準備を始めていた。

はらりと、まだ青い葉が一枚落ちる。

パタパタと廊下を走ってくる音がする。

今日は随分と遠くから聞こえる。

「はーさん、はーさん」

と、いつものように彼女が呼ぶ。

「お風呂の準備が」

「できましたよ」

二重音声。

分裂でもしたのかと、声のほうに目をやりかけて、そのまま座椅子から落ちそうになった。

「な、なにをしてんですか」

「お風呂の準備」

最近頻繁に訪れるようになった患者がいる。
細身で糸目の男で、名を。

「えーっと」

「宇津木です」

そうそう。

宇津木という男。

世話好きなんだか知らないが、家に来るたびに家事をしていくという妙な人物だ。

これがまた、割烹着が妙に似合うんだ。

「うっちゃんは、とーっても役にたつよ」

彼女がいうのだから、たしかに役に立っているのだろう。
ともかく。

「そこに直りなさい。」

宇津木

「はいはい、なんでしよう?」

私の前に正座をする男は、とても優しい風貌をしている。
優しいからこそ、ここに来たのかもしれないが。

「患者が、家のことに手をだすんじゃないありません」

「ですが、この家はあの子一人で掃除するには広すぎますし」

ひとり、ねえ。

どうやら、彼も彼女の正体には気がつかないらしい。

それはそれで、一向に構わない。

「だからといって、どうして患者がうちのことに出すの」
「そうはいわれなくても、私は健康体ですし」

肉体的に傷ついているものが、ここに来るはずはない。
だから、彼は精神が傷ついて、ここにいるはずなのだ。

いまだ、その兆しはみえないけれど、私にはその正体がなんとなく検討がつき始めていた。

確信を持つには、彼と話をしなければならぬ。

「はーさん、お湯冷めちゃうよ」

「あ、そうですよ。」

せつかく丁度よい温度にしたんですから」

「うんうん。」

はーさんの丁度いい温度って難しいからねえ」

「珍しいですよ。」

37.5なんて、微妙な温度を好む方って」

「ぜーったい、それじゃなきゃイヤって言うから、いっつも大変で

」

余計なことを話している彼らを放っておいて、風呂に向かう。

宇津木という男と話すのはそれからでもいいだろう。

「宇津木にお茶出して。」

何か話してて」

「はあい」

彼女の穏やかな声を聞きながら、夕風呂へと向かった。

* * *

朱色の絵画に真っ黒な墨でも零したような空だ。

つい、長湯してしまった。

居間では、和気藹々と楽しそうに宇津木と彼女が話をしていた。

「あ、はーさん」

「お茶淹れましょうか」

寛いでるし、なじんでるし。

なにかムカついたので、そのまま足が出た。

「行儀悪いですよ、はーさん」

「は、ざ、く、ら、さんっ！」

まったくもって、病人らしからぬ男を本気で追い出してやるうかという考えがよぎった。

でも、仕事なのだから、仕方がない。

「さて、はじめましょうか」

「はじめる？」

「もっともあなたの場合は、人を気遣いすぎて、本当の自分を忘れてしまったところにあるようだけど。

こんな元気で陽気な患者は久しぶりよ」

「あはは。

ありがとうございます」

誉めてない。

「で、何に疲れたって？」

座椅子に座って、煙草を取り出し、火をつける。

吸おうとしたところを取り上げられる。

「こつこついうものは、身体によくないですよ」

丁度部屋に入ってきた彼女がそれを取りあげ、奥にしまいに行つてしまった。

なんて連係プレーだ。

別になくても困るわけではないから、それほど気にはならないが、一応あとで、探しておこう。

彼女が行つてからも男は黙つたままだつた。

そのまま度くらい時間が過ぎたか。

庭の獅子嚇しが澄んだ音色を響かせるのを、どこか遠い出来事のように聞いていた。

「葉桜さんは、いつからこの仕事を？」

「いつ、だったかな。」

覚えていないわ」

気がついたときにはこの主で、訪れる患者を待つだけの日々が始まっていた。

それが、厭になることもない。

ここでは、彼女という話し相手もいるし、患者も時によっては頻繁に訪れる。

「覚えていないんですか。」

私も、いつから、どうして、ここに來ているのか覚えていないんですよ」

患者は、たいてい無意識に玄関の前まで來ているから、それは別に不思議でもなんでもなかった。

私にとっては。

「葉桜さんの声は、とても落ち着きますね」

ふいに、男はそんなことを言い出した。
彼は庭のほうを見ているので、何を考えているのか私にはわからない。

だが、その横顔がとても安らいでいることはわかる。
安心しているのだ。

このどこでも分からない場所にいるといことを。
誰かに見つかることもない場所だと。

「何に、怯えているの」

「怯えてなど」

「じゃあ、怖れているの。」

誰かを信じ、自分を信じられる誰かが現れることを」

彼の身体がわずかに身じろぎする。

「信じることで裏切られでもした？」

ぎぎぎと錆びた音でもなりそうな風に、彼が顔を向けた。
張り付いた偽物の笑顔だ。

つまりは、肯定ということだ。

「信じるということは、常にリスクを負う。

だけど、見るべきはその過程。

でしょうっ？」

「そのとおりです。」

私も、そう思っていました」

「信じられなくなった？」

「いいえ」

うそだ。

その笑顔が何よりもそういつている。

「信じることに疲れたんじゃないの？」

応えは、返ってこない。

つまり、そうなのだ。

思っているということだ。

「裏切りが本当に裏切りなのか。

確かめてみたことは？」

「そんな方法があるでしょうか。

私は、彼女のことを何一つ知らなかったのに」

「姿も、性格も？」

「姿は知っています。

ですが、彼女の心を信じることに、」

それ以上続けられなくなって、彼はまた庭を見た。

雀が遊びに来ている。

いつもは五、六羽で来るのだが、今日は一羽だけらしい。

ちちち、と呼ぶと、私の手に止まった。

「飼っていらつしやるんですか？」

「いいえ、野良よ。

喧嘩でもしたの？」

雀は掌の上で、男と同じように首をかしげた。

「喧嘩など」

ばさばさと他の雀が降りてくる。

掌の上にいた雀も飛び立ち、普段どおり彼らと一緒にになった。

「喧嘩など、したことはありません。」

彼女は私にいつも何も言いませんから」

いつのまにか、恋愛相談になっている。

そういうのは、専門分野じゃないんだがな。

「お茶」

「え？」

「いや、なくなったなと思って。」

そういえば、お茶菓子も出してなかったか。

煎餅でも食べるか？」

彼の返答を聞かずに立ち、棚から缶を取り出す。

開けてみると、今日はクッキーしか入っていない。

「クッキーでもいい？」

「いえ、お構いなく」

テーブルにクッキーを置いてから、また座椅子に座る。

「彼女が作ったクッキーは、特別甘いから。」

覚悟して食べたほうがいいわよ」

そういつて、自分でも手を伸ばして口に放り込む。

甘いと思って口に入れたのに、今日のはジンジャークッキーだった。

「甘く、ないですね」

「たまに、あるのよ。」

でも、これも旨いからいいんだけど。

なんというか「

裏切られた？」

「そう。」

そんな感じ」

くすりと、彼が笑った。

硬い笑顔がやつと解けた。

「以前は、ちゃんと何の菓子を用意しておくか、ちゃんと言って置いたりしたの。」

でも、一度としてそのとおりにしてくれた例がなくてね。

諦めて、好きなようにさせているわ。

幸いお客様の評判も良いから」

もしかすると、今日のお客は甘いものが苦手なのかと思い当たったが、思い違いかもしれないので黙っておく。

「彼女もね、頑張ってくれていたんです。」

でも、私は彼女の失敗を許せなかった。

何度も同じ失敗を繰り返す彼女を、許すことが出来なかったんです」

お茶でジンジャーケーキを飲み下す。

「私には理解できなかった。」

どうして彼女が同じ過ちを繰り返すのか。

なぜそんなにすぐに忘れてしまうのか。

そうして、いつか彼女を信じられなくなってしまったんです」

「葉桜さん、どうして人は過ちを繰り返すのでしょうか。」

彼女のように何度も同じ過ちを繰り返す人は多いのですか。

彼女を許せない私が間違っているのですか。

繰り返し続ける彼女が間違っているのですか」

「もう私自身にはなにが本当なのかわからないのです」

彼には彼女を理解できなかった。

感じ方の違いが、彼らをばらばらにした。

もともと間にあつたものがなんなのか、私は知らない。

だけれど、きつと理解しようとすることは無理だったのだ。

人と人は別々の生き物で、考え方も感じ方も違う。

それを理解しようとするのはたとえ言葉にしたとしても難しい。

かける言葉を私は持たない。

ジンジャークッキーを砕いて欠片にし、庭に放ると数羽の小鳥が降りてきた。

「聞いてますか？」

不安そうな声を振り返らずに、口を開く。

「なぜ理解しようとするの？」

だって、他人でしょう？」

「え、だって、彼女は」

「どんなに好きでも、別々の人間よ。」

考え方、感じ方全てを理解するなんて、親であっても無理な話だわ」

「理解しようとしなくて良い。

ただ、彼女と話をするだけでいい。

行って来なさい」

「でも」

「全てを聞いて、受けいれるだけでいい。

それだけで」

彼女は救われる。

おそらく、誰よりも傷ついているんだ。

彼女も。

お互いにお互いの傷に気がつかず、ずっと来てしまったんだ。

どこかで、彼女が話していれば、彼が受け入れていれば、何か少しは変わったかもしれない。

もちろん、変わらないかもしれない。

静かになった部屋の中で、彼女が夕食を運んできた。

「帰ったんだ」

「ん。」

なんか恋愛相談だったみたい」

「みたいって……またいい加減に返したんじゃないでしょうね。

はーさん」

「いい加減なんて。

私はいつでも本気よ?」

「うそくさー」

両手を合わせて、箸をとってから、私はもう一度言った。

「お風呂沸かしておいて」

「また入るの?」

「いーじゃん、何回入ったって」

「別にかまわないけど、そのうち溶けるよ?」

「あははっ、溶けるわけないじゃんっ」

星の瞬く夜空を見上げる。

今夜の空は、落ちてきそうな月を掲げ、ちかちかと星が歌う夜空だ。

彼は今頃彼女にあったのだろうか。

願わくば、穏やかな関係に戻ってくれなことを、この夜空に願おう。

私に今出来るのは、これだけだから。

37・5 (後書き)

すいません。むちゃくちゃ暗くなってしまいました。
現在彼氏と喧嘩しているせいかな？

(2004/08/18)

きせき（前書き）

人の死ぬ未来がわかるとしたら、どうしますか？

きせき

ばらばらと、和紙でできたそれを捲る。

書かれている文字はそれほど古くは見えないが、この本は随分と使い込まれているように見える。

「はーさん、それ、なに？」

いつもより幾分離れた場所からかけられる声に顔を上げると、彼女が縁側の端（ここから五メートルは離れていそうだ）でお茶とお茶菓子を乗せた盆を手に立ち尽くしていた。

「うん、知り合いが送ってよこしたのよ。」

役に立つかもしれないから持っておけて」

「はーさんの知り合いって」

「ここからわかるのは、彼女がこれをとて怖がっているという」
とだ。

書いてあるのはあまり面白いものではない。

人の名前と、時間、それから死に方。

いわゆる、鬼籍、というやつだ。

医者が持つても気休めにしかならないだろうといったのに、送ってよこしやがった意図が測りかねる。

「怖い？」

本を彼女に向けて聞いてみると、慌てて縁側の角まで逃げてしまった。

そこまで怖いものなのか。
私はなんとも思わないのだが。

このままではのんびりお茶をすることもできないのは確かだ。
立ち上がって、居間の引き出しを探る。

ライターがあると思っただけ、今日に限って見当たらない。
代わりにマッチが入っている。

どこかの喫茶店の名前が入ったマッチは、先日の患者が置いていたものだろうか。

まあ、どうでもいいことだ。

マッチを持って、縁側に戻る。

風につけながら擦った一本目は、あっさりと逆風に消されてしまった。

二本目を持って、空いている手で本を手繰り寄せている間に消えてしまう。

三度目こそと火をつけて、ページの間からゆっくりと火をつけ、静かに持ち上げる。

風につけながら、ゆらゆらと火をめぐらせてゆく。

なかなか火の付きが悪い。

ただの和紙なのだから威勢良く燃えてしまえばいいものを。

「はーさんっ！」

大声に驚いて振り返っている間に、飛んできた彼女に手を叩かれた。

「なにしてるのよ、もうっ 手え焼けるまでもってることないでしょ。
よ。

ああこんなに赤くなってるし。

今薬持ってくるから、そこにいてねっ」

矢継ぎ早に言うと、あっというまに家の中にその姿が消える。まったく、なくなったとたんにこれだ。こっじやないと、私も調子が狂うから、こっしたんだけど。

「医者に鬼籍はいらないのよ。

私はいつも私が出来ることをしているだけだから」

庭に声を放し、空の雲に笑いかけた。

未来を知ることに興味がないわけじゃない。

でも、知ったところで何かが出来るわけじゃないのなら、私は知らないほうがいいと思う。

知らなければ、なんだって出来るし、選択の道はいくらでもあったほうがいい。

全部、私が選択してきたのだから、どれもそのままでもいいのだ。誰かに操られているのかもしれない。

自分で選んでいるようで、実は選ばされているのかもしれない。だが、たしかに自分で選んだという実感はあるのだ。

ならば、すべて私が選んだということに相違ない。

「火傷の薬は!？」

「この間使いきったって言ってなかった？」

「……あ!」

戻ってきてすぐにまたパタパタいつもの足音でかけて行くのを聞きながら、私はゆっくりと目を閉じた。

今日も彼女が起こしてくれるのを待ったために。

カランカラァン

おや。

もう来客の時間なの。

「はーさん出てーっ」

それは彼女の役目だから。

私はこのまま寝て待とう。

いつもどおりの日常が戻ってきたことだし。

きせき（後書き）

最近、過去のドリームを携帯サイトに更新していて、こっちをすっかり失念してました。

ついでに白状すると、インシャル頭文字D読んでました。

どれかひとつをやるうとすると、ほかのことが出来なくなるのは、私の最大の欠点です。

きせき、という字はいろいろな風に書けますね。奇跡、軌跡、輝石

……でも、今回は鬼籍。

死がわかるのは怖いです。わからない方が幸せな気がします。未来なんて、わからないほうがいいんです。絶対。

（2004/09/16）

シンдрローム(前書き)

空を自由に飛べたなら

シンドローム

柔らかなグラスグリーンの芝を踏む音がする。

庭を掃除している音かとも思ったが、そんなわけがないと考え直す。

彼女がこんな時間に庭の掃除をしていることなどないし、第一我が家に芝生はない。

目を覚ましてもあたりは真っ暗で、何も見えない。

数度瞬きをし、空を見つめるうちに闇に慣れてきてぼんやりとした何かが見えるようになる。

そうなってから、私は身体を起こした。

「……いたた……」

体中が軋んで、悲鳴を上げる。

起き上がった体勢のまま堪えていると、静かな音で光が忍び込んでくる。

「起きたのかい」

低い男の声で、顔をあげる。

それが誰なのかを確認する間もなく、大きな腕が伸びてきて、静かにこの身体を横たえなおす。

とても大切に扱われる様子に戸惑う。

こんな患者は知らない。

いや、この場合、私が患者なのか。

「まだ朝には早い。」

もう少し眠っていなさい」

優しく目を閉じようとする腕を掴むと、彼はびっくりと震えた。

「私は、どうしたの？」

なんだかわからないこの体の痛みを知らなかった。
それだけだった。

彼は困ったように笑ったようだった。

「覚えていないのかい？」

覚えているも何も、私が最後に覚えているのはいつもの縁側でうとうとしていた記憶だけだ。

あれは夢だったのだろうか、それとも、これが夢なのか。
どうにもわからなかった。

「君は、屋上から飛んだんだ」

優しい声だったけれど、内容は突飛だ。

飛ぶって、屋上からって。

「それ、って。」

自殺？」

「いいや」

即座に否定されたけど、それは彼の願いのような気がする。
たいていの場合、屋上から飛んだら人は死ぬ。
飛ぶための翼は持っていないのだから当然だ。

それなのに、私は飛んだという。
それは何故か。

「君たちの、君の場合はそうじゃない。
ピーターパン症候群シンдрームって、わかるかい？」

ピーターパン・シンドロームというのは、一般に、大人への成熟を拒否しいつまでも子どもそのままであることを願う「おとな・こども」の社会的、心理的傾向を指して用いられる。

「一種のそれだというのが最有力説だ」
「他にもあるの？」

彼は何かをまだためらっている。
そんな気がしたただけなのだけれど、どうやらそれは当たっているらしい。

私の上掛けを引き上げて、あやすように上からポンポンと軽く叩きながら、話し出した。

「それを君に聞きたいんだけど、覚えていないようだからね。
また、一眠りしたら話をしよう」

リズムに合わせてまぶたが重くなってくる。

彼が誰で、私が誰で。
そしてどうい関係なのかなんてわからないけど。

「おやすみなさい」

よくわからないあやふやな温かさを感じながら私は眠りに落ちた。

* * *

ずっと子供のままでいられるなんて、そんなのはまやかしか
ない。

仮に姿が変わらないとしても、心の成長までは止められない。

本人にだって、止められない。

だって、何かを考えると、その行為自体が成長の種を含んでい
るのだから。

ねえ、だから。

ここに帰っておいで。

空を飛ぶのはもう少ししてからでいい。

シンドローム（後書き）

やっと半分折り返し。

しかし、シンドロームむずかしー。

シンドロームにもいろいろあつて、しかもいろんなシンドロームの名前をつけるのもまた別のシンドロームで。

考えてること事態がシンドロームみたいな。

てゆーか、こんなの考えてるとノイローゼになりそー。

次はもう少し明るいのを書きたいなあ。

と思った矢先に『涙』とみて、どうしようもまた……。

（2004/09/27）

涙（前書き）

取り返せないものはないよ

涙

どこまでも続く澄んだ青空と、むせ返る夏の香りを思わせる、暑い風。

その中で、今日も私はまどろみを漂う。

私を起こすことができるものは、ただ一人、彼女だけだ。

彼女は私の身の回りの世話をしてくれる。

が、別に使用人というわけではない。

同居人はいつのまにか側にいて、生きることそれ自体に執着しない私を助けてくれる。

「はーさんはーさん」

ほら、今日も彼女がぱたと駆けてくる。

あの独特の足音は彼女以外に出せないだろう。

「もーまたー」

呆れたような温かな笑いを含ませた声。

それが温い。

このぬるま湯を私は好む。

目が無理やり開かれる。

「わっ、なに？」

「お客様だよ」

悪戯な瞳をくると輝かせ、彼女が奥に消える。

同時に縁側の端からくすくす笑いが届く。
どうやら、今の一部始終を見られていたらしい。

「あー、その、イラストシャイマセ」

その女性は静かに歩いてきて、深々と頭を下げた。

「お邪魔しております」

わかっていて、彼女はあんなことをしたのだろうか。

黒髪は短く、ベリーではないショートで、首元は涼し気だ。

夏らしい薄着で、真っ白いシャツの上から薄い水色のカーディガンを着ている。

カーディガンよりわずかに濃めのタイトスカートからほっそりとした肌色ストッキングの足が伸びている。

「お仕事はOLさんでしたっけ」

「まあそうですね」

くすくす笑いに妙な居心地の悪さを感じる。

とりあえず、お客様は立たせておくものじゃない。

腰をあげ、居間に手招きする。

「飲み物は、冷たいものがいいかな。

アイステイとアイスコーヒー、どっち？」

「どちらでもいいです」

「そんなこと云わずに賭けてくださいな」

「そういわれても」

「この主はあなたなんだから。」

たしかにそうなんだけど、彼女はわたしの召使ではない。そういつても信じてもらえるか自信はない。

結局、出てきたのは赤いオレンジジュースだった。

「いつも、こうなんですか？」

「ええ」

冷たい液体を喉に流し込み、女性が不思議な表情をしていることに気が付く。

「飲まないんですか？」

彼女はただ、笑っている。

「オレンジジュースは嫌い？」

「いいえ」

しかし、彼女の表情は堅い。

「いったいどういうことだろう。」

「これ、本当にオレンジジュースなんですか？」

彼女の問いには、疑いが現れている。

赤いオレンジジュースは珍しいかもしれないし、これは見様によつてはトマトジュースだ。

無理もない。

「さあ？」

あいまいに返すと、彼女はますます困った様子で微笑んでいる。

「あの、葉桜さん？」

「なんででしょう？」

彼女は不思議に思っているのだろうか。

いつもの患者たちのように。

「あなたは、いえ、あの、」

何かを言い出そうとして、戸惑って、ためらって。

なかなかこういう患者は難しい。

私が何も云わずにじっと見てみると、どんどんその白い顔が赤く染め変えられてゆく。

たまらずに、笑い出してしまうと、もっと面白いだろうか。

「先日のことなら、どうぞ気になさらないで」

ふと目に入った左足の小指の爪が伸びている。

そろそろ切るべきか。

それから女性の方をみると、ますます恐縮して赤くなっている。まあ、分かっていると言っただけだ。

彼女が最初に訪れたのは、二、三日か一週間ほどか、あるいは一カ月ほど前のことだった。

私を前にして、いろんな反応をするのばかり見てきたけれど。

泣かれたのは初めてだった。

「え、あれ、す、すいません。
どうしてかな、とまんな」

困った顔で微笑みながら涙するする女性の手を引いて、ただ柔らかく抱き締めた。

母親がそうするよつに、ただ、温かく。

ここにくる人は、誰しも闇を抱えきれなくなって、やってくる。
だから、彼女のようなことがあっても不思議はない。
むしろ、今までなかったということのほうが奇跡的だ。

「わけは、お聞きにならないんですか？」

どうして。

「だって、あんな、わけもなく」

まあ、そういうこともあるでしょ。

「話したいのなら聞きましょう。
でも、そうでないなら」

こくりと、もう一口ジュースを飲む。
音が聞こえるよつに。

「聞き出しましょうか？」

もちろん、そうするつもりはまったくくない。

ただ、彼女の反応を楽しんでいるだけなのだから。

目の前のブラッドオレンジジュースよりも赤くなつた彼女は、しかし私をしっかりと見据えた。

「あなたを見たとき、とても懐しさを感じたんです」

「上京して数年、私は多くを手にしてきました。

けれど、同時に多くを手放してきました」

「その手放してきたものを、葉桜さんの中に見たんです」

口調に滲む響きが、彼女の不安や焦りを教えてくる。

でも、彼女はもう答えにたどり着いているようだ。

答えはいつだって教えられるものじゃない。

自分でたどり着くことだって必要だって、彼女はちゃんとわかっている。

問題は、答えにたどり着いていることに気が付いていないってことだ。

だから、今回の私の仕事は少しだけ。

「手放してきたものは、二度と手に入らないものばかり？」

「え？」

「まだ取りにいけるんじゃない？」

本当に手遅れでないものならば。

人が人生で手にすることの数は決まっているかもしれない。

でも、決まっているのなら、きつと手に入るはず。

「今度会う時は、もっと楽しい話をしましょ」

すべてを手にいれたひとりの女性の話を。

カランと、空になったグラスの中で、氷が撥ねた。

「はーさんは」

目の前でオレンジ色のオレンジジュースを飲みながら、彼女が言う。

「はーさんは、とりにいかないの？」

「なにを？」

「……なんでもない」

そっぽを向いてしまった彼女の表情は、こちらから窺えない。

「あーお祭りに行きたいねえ」

ごまかすように彼女が言った。

私は、ただ、空になったグラスを、もう一度啜った。

涙（後書き）

もはや恋愛小説じゃないよ。

なんですか。人生相談っぽくなってるので、なってない。葉桜さん、投げやりすぎ。

でも、なんかふとした時にこう、ぐっときて泣きたくなるようなことってあるじゃないですか。

哀しいとかじゃなくて。ああ帰ってきたなあみたいなの（どこに）。

あんまり男性患者が多すぎるので、ちょっと書いてみたともいえる女性患者。

名前を出さないから書き辛いと分かっているけど、なんか名前をだすタイミングが難しい（そんなことはない）。

（2004/10/12）

永遠（前書き）

変わるものと変わらないもの

永遠

「ねえ、はーさん」

常にならない、心細げな声に薄く目を開いて隣を見ると、彼女が縁側に足を投げ出して、暗い顔をしていた。

薄い水色の浴衣に結わえた蝶々結びの帯も、頼りなげに垂れ下がっている。

手遊びしているのは、先日の患者が彼女に置いていった雛型のお手玉である。

黄色い雛を放り投げては反対の手で取り、また放り投げては反対の手で取る。

それを一つずつ増やしてゆく手捌きは、なかなかのものである。

「なあに？」

「はーさんは、ずっとここにいるよね？」

なにを当たり前のことを聞いているのだろう。

ずっとここにいたのだから、ずっとここにいるに決まっているじゃない。

「当たり前でしょ」

即答すると、驚いたようにその動きが止まり、全ての雛が縁側に落ちる。

かと思つと、目の前に影が出来て、彼女の白い顔がある。

「本当？」

とても嬉しそうだが、なにがそんなに嬉しいのだろう。

「約束ねっ」

勝手に指切りをして、玄関の呼び鈴の音に駆けて行ってしまった。一体、なんだというのだ、あの様相は。

指切りした小指をじっと眺めて考え込んでみても、何が変わるわけもなく。

縁側を歩いてくる音に顔を上げて、彼を迎えた。

「いらっしゃい」

年は一五、六位で、背格好は良いがまだまだ発育途中と見える。黒髪は短らず長からず、といったところだ。着ているのは黒い学生服で、革鞆を提げているところから、おそらく学校帰りなのだろう。

こんな場所に少年が来るのは、不釣り合いな気がする。

「あ、の」

「甘いお菓子は好きかしら？」

「え、あ……はい」

立って、先に居間に入ると、少年も入り口まではついてくる。だが、そこから中に入る様子はない。

お茶菓子として彼女お手製のミニシュークリームをテーブルに置き、定位置の座椅子に座ると、彼女が二人分の紅茶を淹れてくる。

少年は所在無気に居間の入り口に立ちつくしたままである。

「座ったら」

「あ、はい。」

失礼、します」

言われるとおり座ったものの、不安そうに辺りを見回している。

「食べたら」

「……頂きます」

逡巡の後、彼はミニシュークリームを口に入れた。
そして、すぐに咳き込んだ。

「飲んだら」

今度は何も言えずに、一気に紅茶を飲む。

「あつつつつ、な、え、ロシアンルーレット!?!」

普通にシュークリームを用意しているとは思わなかったけど、まさか今日のはロシアンシュークリームだったとは。

相変わらず、見た目も予想も裏切るお茶菓子を用意してくれる。

自分でも一つ食べてみる。

が、意外に普通のチョコレート味だ。
残念。

「何味だったの?」

少年は涙目で、コーヒー味と答えた。
意外でもなんでもない普通の味のはずだが、咳き込むか。

「俺、コーヒーダメなんです」

咳き込むほど嫌いか。

私にとっちゃむしろ『当たり前』なんだけど、難儀なことだ。

むせている少年を他所に、庭に遊びに来た雀を見る。

今日は三羽で遊びに来ている。

よく見ると一羽に二羽がくっついておるようにも見えるが、遅れている一羽を気遣ってもう一羽がワザと遅れてくっついておるようにも見える。

「少年」

何となしに、彼に問いかけていた。

「永遠って、あると思う？」

私の問いに、彼は少し考えたあとで、答えは返ってきた。

彼自身が問い続けてきた問題であるはずなのに、その答えが返ってきたことが意外だった。

「いつかは皆、別々の道を進んでいくけど、それでもこれまでのこと、過去にあったことは絶対に変わらないし、消えないと思うんです。」

いつまでもその時の気持ちとか、絶対に忘れない。

だから、その、なんていったらいいのかな」

少し照れながら話す少年は、ここに来たときの緊張を僅かに解して、穏やかに微笑んだ。

「その気持ちが変わらないのなら、これからも貴方の友達と付き合い続けていけるわね」

私の言葉に驚いたように目を見開く。

彼の二人の親友は、彼に内緒で最近付き合い始めたという。

彼女の方を異性として好きだった彼は、何を信じていいのかわからなくなったのだ。

「それは」

しかし、私の言葉に彼の表情が揺らぐ。

「わかりません」

わからないけれど、

「でも、あいつだって俺を出し抜こうとかそんなこと考えてなかったと思うから」

だから。

「許せると、思います」

彼らの親友として、二人を見守っていけると。

少年は淋しそうに微笑んだ。

今はまだ辛いけど、でも、いつかは素直に二人を祝福できるようになる。

そう、信じられる。

永遠は、永く遠く、ずっとずっと未来を見据えてという言葉。

時が移り変わるように、色々なことが少しずつ変わるかもしれない。

でも、ずっと変わらないことは絶対にある。

絶対にあると信じること、願うこと。

それらはずっとずっと変わらず昔からいるんな人が信じてきたことだ。

永遠に続く想いで、世界は成り立っている。

「でも、お茶菓子に関しては変わって欲しいわねえ」

少年が帰った後、縁側で彼女とふたりでお茶を飲みながら言うってみる。

「変わらないこと。

それがごこの法則なんですよ」

しれっとして、彼女はいつもどおりにお茶を飲んでいた。

ごこの永遠は限りがあるのかどうかわからないけど、いつまでも彼女とこんな風にしていきたいと思います。

永遠（後書き）

永遠を信じていない自分がこんなテーマで書くのは、難しい。
てか、いいかげんお題は全部が難しいと認めざるを得ない……。

いつか作ってみたいロシアンシュークリーム。

中身は甘いから辛いのがらしょっぱいから無味まで選り取り見
取り。

人に何も言わずに食べさせてみたい（マテ）。

（2005/03/13）

棘（前書き）

帰る場所

棘

カラン、と乾いた音が弾けた。

鳴ったのは、透明のグラスに入った溶け欠けの氷。

鳴らせたのは、グラスを持つ私の手。

季節は夏。

青い空と白い雲と緑の多い夏の庭で、私は浴衣の足を投げ出して片手に団扇を持って仰ぎながら、だらだらと時間を過ごしている。

「はーさん、はーさん」

パタパタといつものように縁側を駆けてくる彼女の後ろから歩いてきた青年の姿をみて、手が緩み、団扇が落ちる。

「うわ、」

「あ、や、あの……ごめんなさいっ」

さっと立って、思わず駆けだそうとしたけれど、前に進めない。片手をしっかりと捕まれてしまっは。

「なんで逃げるんだい？」

「なんでって、その、あの、えーっと、ねえ!？」

助けを求めて動かした視線のどこにも彼女は見あたらない。

先に逃げやがった。

患者じゃないじゃない。

聞いてないわよ、この人がくるなんてっ。

まあ、先に言ったら私が逃げるからなんだろうけど。

「別にとって食べようって訳じゃないし、今日は視察でもなんでもないから」

じゃあ、なんで来たのさ。

「たまには愛弟子の仕事ぶりでも見てやるつもりでね」

うそつけ。

何が愛弟子だ。

勝手に出て行っておいで、今更何を言い出すのだ。

この男は。

「お茶でも飲みながら、少し世間話でもしようよ」

「誰が淹れるんですか？」

棘を含ませて聞いてみると、ただただ満面の笑顔が返ってきた。

こついつとときに限って、彼女はいなくなっているんだから。

いつもの客間に彼を座らせ、私は台所で熱いお茶を淹れて戻る。

お茶菓子はあるのかと戸棚を覗けば、彼の大好きな栗羊羹がしっかりと入っている。

大きなため息が出た。

「俺が来て、そんなに嬉しい？」

「うわあつつつ」

耳元で囁かれたことに驚き、慌てて逃げようとしてバランスを崩しかける。

でも、畳の上に倒れることはなくて、彼の腕の中にいる。
なんでだ。

「危ないな。」

栗羊羹が食べられなくなるじゃないか」

「誰のせいだと……っ」

言っても仕方がないのだ。

彼は私の手から栗羊羹をとると、私を抱えたまま（わざわざ机を
まわって）座椅子に座った。

どうして離してくれないんだ。

「あのですねー」

さつさと栗羊羹の包みを開いて、丸ごと頬張っている姿を見て、
その後の言葉をいうのは諦めた。

もう聞いてはいないから。

抱えられたまま、どうしてここに彼が来たのか考える。
何もなくてふらりと寄るなんてありえない。

「葉桜」

「んあ？」

「……あのね、年頃の女性がそんな言葉を使うものじゃないよ」

注意されてしまった。

呆れてもいるようだ。

「最近ここは評判良いみたいだね」

「そうなの？」

評判なんて興味がなかったし、気にしたこともなかった。てか、業界の評判って、ここみたいな場所が他にもあることのほうが驚きだ。

「帰省率百パーセントだって聞いてるよ」

患者を送りかえす確率のことを、帰省率と呼ぶ。

でも、別にそうしようとか考えたこともなくて、ただ私は元の居場所に帰りなさい、生きることから、現実から逃げないでと言っているだけだ。

何も返さずにいると、相変わらずそういうことに興味が無いんだね、と彼が笑った。

不思議と心が安まってくる。

「だからね、そろそろだと思って」

「なにが？」

私の問いには答えず、ただ私を見て、優しい目で微笑んでいて、ひどく居心地が悪い。

私の髪を優しく撫でる大きな手も、柔らかく抱える温かな手も懐かしく、自然と目蓋が重くなってくる。

「夢を見たそうだね」

「んー」

「どんな夢だった？」

どうして知っているのだろうと思いつつも、妙にすんなりと喋っていた。

「ピーターパン」

「それだけじゃ、ないだろう?」

なんだっけ、なんの、夢だったかな。
ひどく、哀しい、ふわふわ、の、夢。
だった。

* * *

寢息を立てる少女の頭を撫でていると、正面に気配は現れた。

「いつもすまないね」

彼女は俺を見ずに湯飲みを片付けてゆく。
不機嫌そうに見えるのも不安そうに見えるのも、きっと気のせい
ではない。

水色の素地にゆらゆらと桜の花を揺らしながら、パタパタと忙し
そうにしているのは、俺と話すのを避けようとしているからだろう。

「葉桜を気に入ったのかい?」

出て行くようにした足を止め、こちらを見ずに頷く。

「行って欲しくないのだね?」

また振り返らずに頷くが、かすかにその姿が揺らいでいる。

「でも、わかってくれるね?」

「わからないよ」

哀しそうに言い残して、小さな姿が台所に消えた。

腕の中で眠る少女はそんなやりとりにも気がつかずに、ぐっすりと眠っている。

初めてあったときも、彼女はここで眠っていた。

声をかけられても起きることなくぐっすりと眠っていて、死んでいるようにも見えた。

だが、ここに死者は来ない。

来るのは、生きている患者ばかりなのだから、彼女は患者なのだ。

しかし、こちらが気がつく前に上がり込んで眠っている患者など初めてだった。

どうすればいいのかわからなかった俺は師の元に言った。

彼女に留守を頼んで。

なかなか帰らなかったのは、方法が見つからなかったわけではなく、彼女の場合はここにいることこそが治療だったからだ。

彼女の内面はともきれいなもので出来ていて、それで考えていたよりもずっと優秀な医者となった。

でも、それでも葉桜は患者だった。

「もう、帰る時間だ」

「やだっ」

とたんに彼女が部屋に飛び込んできて、葉桜にしがみついた。

「いやだよ。」

「はーさんはここに居るの。
ずっと居るって、言ったもんっ」

珍しいものだ。

俺にさえ懐かなかった彼女をすぐに手懐けてしまった。

そしてそれは、やはり彼女の心が澄んでいるせいでもあるのだろ
う。

「いや、帰るのは俺だよ」

「え？」

「今日は本当に様子を見に来ただけなんだ」

「なんだあ。」

「驚かさないでよ、センセ」

急に安心したのか、ほろりと彼女の目から涙がこぼれ落ちる。
それを拭き取ってやる。

「しかし、きつと近いうちに葉桜は帰ることになる。
ちゃんと覚悟はしておきなさい」

そういうと、噛みつきそうな勢いで睨まれた。

誰にだって、帰る場所はある。

夕暮れの公園のチャイムの音を聞いて、急に家が恋しくなるよう
に。

ないようできて、それぞれに帰る場所はある。

だから、そのときを忘れずに時を過ごそう。

棘（後書き）

久々に書けたー！

最近、社会人二年と二ヶ月半を過ぎて、初めて出張しました。まあ、県内でしたけど。

いろいろとやらかして、まだまだ成長しないとなあと実感している今日この頃です。

出張中に近所で、つか実家のお隣さん宅が火事になりました。全焼で、うちもやばかったみたいなんですが

先月家の塗装工事を行ったのと、前日の雨で垣根が濡れていたおかげで

火事側の窓ガラスが割れたり溶けたりするぐらいで済んだらしいです。

実家にいた祖母も怪我もなかったし、お隣さんには悪いけど、本当に良かったっ！

帰る家があるのは、本当に大切です。

と、実感したのでその火事があったからというわけではありません。なんてゆーか、書きたくなっただけかいたら、こうなった。

葉桜さんの師匠ってかセンセは何者ですか。

とか、いろいろつつこみたいけど、そこは押さえてください。近いうちにこのシリーズも終わるので。

（2005/06/28）

パンドラ(前書き)

見てはいけないといわれると見たくなくなる

パンドラ

ズキズキと頭が痛む。

内側から殴られているような衝撃に、自然と眉が寄る。

そうして、苦しんでいる私の頭に乱雑に氷嚢が置かれた。

「あの、もう少し、優しく」

私の言葉が聞こえないふりをして、彼女はまた台所へと消える。

これ以上ないくらい怒られてしまったあとだし、まあ当然なんだけど。

「ねー」

少しぐらい話を聞いてほしい。

気配さえも探れないほど遠くに言ってしまった彼女を諦め、いつもとは違う角度で庭を眺める。

そこは青い空と白い雲と、ほんの少しの緑の木々の夏の庭だ。

いつもと変わらない場所なのに、不思議と違って見える。

「センサーなにしてんの？」

声の方へ視線を移すと、吊り目の少年が私を怪訝そうに見下ろしている。

なについて、いわれても寝かされているとしか答えようがないんだけど。

「まあ、なんでもいいか」

いいのかよ。

「今日はセンスにちょっと相談があるんだ」

「そおだんらん？」

いかにも面倒そうだと思いつつ、のそのそと起き上がり、座椅子に座る。

すると思っていることがわかったのか、彼はクスクスと笑った。

「そんな面倒なことでもないから、まあ聞いてよ」

「面倒じゃないなら、相談の必要だつてないじゃないの」

私の文句なんて聞こえないみたいにさらりと無視して、彼は勝手に話し始めるから、私も適当に外を眺めながら聞いた。

いつもとは違う位置から眺める夏の庭はとても不思議なものに見える。

何がどうしてそう見えるのかというのは説明のしようもないんだけど、でもとにかく何かが違うてみえた。

「で、俺どうしたらいいかわかんないからさ。

センスなら、知ってると思っただし」

そうそう気軽に来られる場所のはずはないんだけどなあ。

「あのねえ、そんなこと聞かれても私はあなたじゃないんだから、どうしたら、なんてわかるわけじゃないじゃないの」

考え方も行動も全部が全部同じなら、そんなつまらない世界はない。
いい。

そこで生きる意味があるのかどうかもあやしい。
もしも私がそんな世界に放りこまれたら、どんなことをしてでも
逃げ出すだろう。

「じゃあ、センセならどうする?」

なおも聞き続ける少年に、ひとつため息をつく。
本当はどうしたいか決まっているくせに。

「じゃあ聞くけど、私が言ったことをあなたはそのまま実行するの
?」

「はあ?」

「わかってるならきくな」

こっちは頭が痛くてそれどころじゃないってのに。

畳の上に寝転がって丸くなる。

当然、もう聞かないぞという意思表示でもあるのだが。

「で、センセならどうする?」

通じていないらしい。

しかたない、と体を起こそうとして、机の端に肩を強かにぶつけ
てしまった。

痛い。

「……………」

痛みで何を言おうとしたのか忘れてしまった。

これはきつと、彼自身が答えにたどりつけるといいうことに違いない。

そういうことにしてしまおう。

「答えは、あなた自身の中にある」

「ないから聞いて……あ、ちょ、まてよ。

寝るなよっ」

「お客様のお帰りよ」

寝転がって見えなくなった視界の端で騒ぐ声が、すっと消えた。

そのすぐ後で、冷たいものが額に当てられた。

それは決して乱雑にされたわけではなかった。

だけど、何か不自然さを感じて目を開く。

そこには、不安そうな彼女の姿があった。

「どうしたの？」

なんでもない、と彼女は首を横に振って、台所へと消えた。

全部が同じ世界も全部がわかる世界もどちらもつまらないけど、

彼女の気持ちぐらいは知りたいと思った。

開けてはいけない、見てはいけないといわれるパンドラの箱を開くようなドキドキを胸に、もう一度目を閉じる。

彼女はどんなことを考えているのか、どうして私のそばにいてくれるのか。

それを知りたくもあるが、それがここにいるという私の世界を壊すものならば、知りたくないと思った。

パンドラ(後書き)

実はパンドラの箱はもう開いていた。

……とかってオチつけたら、どうなるのかな？。

(2005/07/09)土 20:20:28

And that's all . . . ? (それでおしまい)

眠っていると、いつもより騒がしいパタパタが聞こえる。
無論、彼女が走り回っている音だ。

今日は大掃除をするといって、朝から彼女は走り回っている。
当然、私にやる気などあるわけがない。
いつもの場所で座椅子に座ってうたた寝している私は、そのうち
邪魔にされることだろう。

その前に涼しい玄関にでも行きますか。

「はーさんっ」

「あーはいはい。」

わかってまーす」

言われる前に動く。

こっちのほうがやっぱりいいわよね。

あの子の機嫌も。

玄関に素足を降ろすと、石畳がひんやりと冷たさを伝えてきてく
れる。

玄関は日陰でもあるので、縁側にいるよりも涼しいし、風通しは
いいし、思わず眠くなってしまっ。

でも、ここはお客様が唯一通る場所だから、長居はできない。

(ま、たまには)

両目を閉じて、視覚以外の感覚で感じる夏を楽しむ。
蝉の声に交じって聞こえるのは、葉擦れの囁き、風の音。
真夏の陽光に照らされた木々が放つ、緑の芳香が匂いたつ。
肌をやわかく風が撫でていくのも、空間のすべてが眠りを誘う。
ちりーん。

呼び鈴代りのベルの音までもが、誘いの音に聞こえる。

「葉桜、こんなところで」

揺さぶる手の熱さと、聞き慣れた声音で目を覚ました。

目の前には浴衣に羽織り姿の男が立って、心配そうに私を見ている。

風貌はどこか凡庸としているのに、眼光の奥が鋭く見つめている。

「あ、せんせえ」

「俺を出迎えてくれるつもりで？」

髪を櫛とおらせる大きな手が一房を掴み、口づける。

気障ったらしい動作に我に返る。

「んなわけないでしょ」

彼をじろりと睨みつけると手を離し、勝手に隣に座り込んだ。
聞かれた所でこちらの答えも決まっているし、彼もやはり同じように座るのだから何が変わるといってもないのだけれど、それでも一言聞いてみるぐらいはしてほしいものである。

「今日はどんな用事で？」

いかにも面倒そうに訊ねると、意外だと表情で返してきた。失礼な。

「用事がなくちゃきちゃいけないのかい？」

まったく、極端な人だ。

「別に、いいですけどね」

彼女の手を借りて立ち上がる。

彼の後ろを通り抜け、居間へと向かう。

彼が立ち上がるような気配はないので、立ち止まって振り返った。

どきり、とした。

彼はとても穏やかな目で私を見つめていたから。

包み込むほどに、甘い瞳をしていたから。

「なにしてんですか、せんせ」

動揺を押し隠して、ぶつきらぼうに声をかけ、早足で戻る。

彼の笑い声が背中を押していた。

居間の座椅子に座って、いくらも経たないうちに彼もやってくる。そして、普段は客が座る場所に座って、またにっこりとほほえんだ。

「気色悪い……」

ますます笑顔になったので、彼を見るのをやめて庭に視線を移す。いつも通りの夏の庭が、私を出迎える。

と、突然首を無理矢理に向かせられた。

「いたつ、な、急に何ですか」

彼は至って真面目に言う。

「変わらないねえ」

「はあ？」

脈絡もなく、そんなことを言われても困る。

首も痛い。

「なんでもいいですから、離してください」

無理矢理に向けさせられた至近距離には彼の顔があつて、みたことのないような優しい目をしている。

よく見ると長い睫毛はかすかに震えていた。

優しくみえるのに、どこか怯えている風である。

失礼な。

なぜに、何に、何故に、どうして、私になんて、そんな価値もないのに。

「ねえ、葉桜」

「先に手を離してください」

私の言葉は無視して、彼は続ける。

「ここにいたいかい？」

意味が、わからない。

ここにいたいかって、ここって、この家よね。

敢えて、居たいかどうかを口にする必要があるのか。

「だったら、なんだっていうんですか」

強い口調で返すと、ようやく顔を解放された。

首が痛い。

捕まれていた顎が痛い。

「別に。」

それならそれでいいんだ」

わけがわからない。

いつもと違いすぎて調子が狂う。

普段だったら、もっとデタラメな人で、ふざけてばっかりなのに、
こうして本当に先生みたいな反応をされるのは困る。

どうして、私が困らなきゃならないのよ。

「あのね、私は誰かに了解を得ないとここにいられないわけ？」

彼は何も答えず、いつもの意地悪な笑みを浮かべる。

なにがそうさせたのか、何に安堵したのかわからないけれど、こ
れだけはわかる。

彼は、安心、したんだ。

「いつまでだっているわよ。
ここが私の居場所だもの」

貴方のために居る訳じゃない。
私のために居るわけでもない。
他の誰かのために居る訳じゃない。

ここが私の居場所だからいるだけだ。
当たり前のことだ。

「センスの用事はそれでおしまい？」

話を聞くこと。

それは私の日常で、答えはその次いでだ。

「いや、もうひとつ」

そういつて、彼は私の正面に回って。
押し倒した。

「葉桜を口説きに」
「馬鹿！」

鳩尾を思いつきり蹴り上げると、蹠踵けながら退いてくれた。
まったく。

いつもどおりに戻ってよかった。

戻ってきた彼女は赤い目で、微笑んでいた。

*

夏の匂いのする庭を前に縁側に座ったまま、ぼんやりと眺めていた。

そこのある庭と言わず、通り抜ける犬や猫に限らず、空を飛ぶ鳥に限らず。

ただ、世界がすべてそこに止められたような庭だ。

汗が落ちる。

耳の後ろを通り抜け、背中を通ろうとして、服に吸い込まれる。汗を吸い込んだ服は、私の背中にしがみつく。

「はーさん、はーさんっ」

パタパタと、小さな足音がかけてくる。

それを振り向かなくても、誰なのかわかる。

変わらない日常が戻ってくる。

And that's all . . . ? (それでおしまい) (後書き)

<<追記>>

なんか、タイトル通りに「それでおしまい？」とか訊かれそうで恐ろしい話になったような。

これで、また「冷たい手」にループしていく感じです。

葉桜さんいなくなっちゃうと、このシリーズ書けなくなるのが寂しいので、こんな終わりになりました。

つが、シリーズで書くなら「モノカキさんに30のお題」から抜けないとね。うん。

(2005/10/11)

Web拍手(2006/04/03)(前書き)

安岐さんリクエスト「はーさんの客いじり」

目の前の女は、ただ普通に団扇を揺らしているだけだった。単に暑いからそうしているというのは容易に想像がつく。

自分だって、服の触れる場所からじつとりと汗が滲んでくるのがわかる。

「あつついわねえええ」

こちらを向くわけでもなく、夏真っ盛りな庭を向いたまま。

「はーさん、髪解いちゃ駄目だってばっ」

案内をしてくれた少女が彼女に駆け寄り、そばに落ちていた幅広のリボンを拾い上げる。

「暑いって言うから、結んであげたのに！」

彼女はただ笑って言った。

「いらっしゃ」

「人の話を聞きなさいっ」

ぱこん、と軽い音と共に彼女の姿が消える。

どこに行ったのだろうと見回すが、どこかに残滓があるわけもなく。

「あの子は気にしなくていいわよ」

既に立って居間に入ろうとしている女に自分も続く。

彼女は居間の座椅子にドカリと座ると、うっとうしそうに髪を持ち上げ、片側に寄せている。

「これだけ暑いとさあ」

行儀悪く浴衣の内側を持ち上げ、団扇で風を送りながら続ける。

「春が恋しくなるわね」

そついえばどうしてだろう、と思う。

今は春だったはずなのに、ここは夏がある。

正確には、今朝近所の桜が満開だったのに、この庭は青々とした緑があり、空には入道雲がむくむくと育っている。

「あの」

「暑いわねえ」

言葉を遮って、彼女が呟いた。

Web拍手(2006/04/03)(後書き)

リクエストではーさんの客いじりてコトで、おもてなし。てか、全然まったくもてなしてないし。

いや、相手してるだけこの人はおもてなししている部類にはいるのかもしれません。(相手…してるか?)

安岐さんリクエストありがとうございます。ご要望に添えました?(2006/04/03)

Web拍手(2006/04/24)

普通に遊びに行ったら、はーさんと言う人は眠っていた。

折角遊びに来たのに。

隣に座って、彼女の出してくれたトロピカルジュースを飲む。

夏の庭に明るい黄色の飲み物はよく映える。

気がつくと、いつのまにか起きていたはーさんに手元を覗きこまれていた。

「いーなあ、いーなあ!!」

奥に向かってはーさんが言うと、盆に二つめのトロピカルジュースを乗せて、少し怒ったような顔で彼女が言った。

「お仕事サボってる人の分はありませんっ」

見守っていたら、手元のグラスが取り上げられた。

「はーさんっ」

「だっってくれないんだもん」

Web拍手(2006/04/24)(後書き)

トロピカルジュースって響きが好きです。夏！って感じ。
あくまで、私の主観ですが。

(2006/04/24)

Web拍手(2006/05/01)(前書き)

はーさんの師匠

Web拍手(2006/05/01)

小中高ともまったく代わり映えのしない通学路を歩いていて、覚えのない古い建物を発見した。

初夏には珍しい夏日和の気温は28度。

夏日和じゃない。

完全に夏だ。

「やだなあ、白昼夢？」

半日の授業で終わってしまった帰路を、自転車を押して上り坂を歩いていた。

その家のある場所はたまたまに利用する近道があった。

坂は急になるけれど、その分早く帰り着けるし、何より木陰があるので雨の日や日差しの強いときは利用することが多い。

なのに今日の前には随分古くからありそうな木製の門が構えてある。

「……あーもうっ」

がしゃんと自転車を壁に立てかけ、僅かな木陰に寄りかかる。少し休まないとやってられない。

そんな風に休んでいると、急に強くて涼しい風が吹いてきた。思わず目を閉じ、次に開けると門の前に男の人が立っている。

三十前後に見える男性は濃い緑の着物を着ていて、とてもおっとりとした様子に見える。

「何してんですか？」

「開くのを待ってる」

何を言っているのだろう。

熱で頭をやられた可哀相な人なのだろうか。

「君も中で休むかい？」

振り返った男の笑顔が、一瞬眩しく見えた（幻覚です）。

Web拍手(2006/05/01)(後書き)

はーさんとこの師匠のナンパ。

(2006/05/01)

暑いのは夏だからであって、だからといって、暑いのに耐えられるわけもなく。

「はーさん!？」

振り返ると、彼女が仁王立ちしている。

彼女が怒っているのは果たして、素足で庭に出ていることが、浴衣の裾をたくし上げていることが、庭の池を囲っている石に座っていることが。

それとも池に足をつつこんで涼んでいることが。

「気持ちいーよ」

「もー、そろそろ予約のお客さん来るっていったじゃん」

「そーだっけ？」

そもそも予約制じゃないじゃん。

「今度からそうすることにしようって言ったのはーさんでしょっ」

言ったかなあ、と考え込んでいると彼女が庭に降りてくる。

「そんなに暑いなら、春とか秋にすればいいのに」

好きにできるんでしょ、と怒られたけど、それは難しい注文なのだ。

だって、夏以外の季節を長く思い浮かべていられないのだ。

「…じめん」

「いや、いやよ」

わかっている彼女がすまなそうに言うのに笑って返す。

「しかたない。」

「お仕事しますか」

涼むのはここまで。

たまには彼女の言うことを聞いてやるわ。

Web拍手(2006/05/15)(後書き)

はーさんの夏のひととき。

(2006/05/15)

Web拍手(2006/06/12)(前書き)

鯉のぼりの泳ぐ空

涼しい風が強く吹いてきて、解いてある髪を揺らす。

ここはいつもの屋敷ではなく、どこかの学校の屋上だ。

眼下では生徒たちがスポーツに興じ、教室の開け放たれた窓からは教師たちの声が辛うじて聞こえるだけ。

「屋上って初めて来たわね」

「出口間違えたんでしょ、はーさんが」

醒めた彼女の言葉に苦笑し、自分の身長よりもかなり高い柵に背中を預ける。

「だって鯉のぼりが見たいっていうし、ね」

目の前の呆然としている少年に頬笑みかけると、怒ったように返された。

「だからってなんで屋上なんだよ!?!」

「どこにあるかわからないからでしょ?」

私の代わりに答えてくれる彼女に甘え、私自身は空を仰ぐ。

青く青く澄み切った吸いこまれそうな空に目を細めて、風を感じる。

「まーどこでもいいじゃない。

こんだけイイ天気なもの。

どこかしら見つかるわよ」

目を閉じてかつて見た大きな鯉のぼりを思い浮かべ、もう一度瞳を開く。

一瞬だけ、空にその鯉のぼりが泳ぎ、あっという間に風に流されかき消えた。

Web拍手)2006/06/12(後書き)

500色の練習。なのに、はーさん。

)2006/06/12(

夏という季節しか知らないワケじゃない。

だけど、私はどれだけ暑くてもこの季節が大好きなんだ。

そう言つと、彼女は団扇で私の風を送りながら、大きく息を吐き出した。

「でもさ、バテるほどの暑さにすることないんじゃない?」

「馬鹿。」

これが夏の醍醐味つてもんよ」

涼しい室内で寝転がったまま、私は軽い笑いを零す。

「別に外に行く用事も無いでしょ?」

暑いときは涼しい室内で夏を感じるのが一番だ。

彼女ではなく、縁側につるした風鈴がリリリ…と同意の声をあげた。

Web拍手(2006/08/18)(後書き)

長らく更新してなかったなあと。

リハビリにオリジナルではーさんを書いてみました。

(2006/08/18)

Web拍手)2007/02/14(前書き)

力力才99%

雪を被った梅に手を伸ばし、そっとそれを払う。

光の残滓がキラキラと目の前に落ちるのをうつとりと眺める。

「何してんですか、せんせ」

「いやあ梅が綺麗だなあって」

へらりと、縁側で座っている彼女に笑いかけると、露骨に眉を顰められた。

何もそこまで毛嫌いしなくても。

「んじゃ好きなだけそこにいてください」

彼女が何かを取り上げ、俺は放り投げられた小さな包みを受け取る。

それは小さな小さなチョコレート。

の、欠片。

「……ふつうさあ、バレンタインだったらもうちょっと」

「ただのおやつです」

こちらを見もしないで彼女もまた、手元のそれを自分の口に放り込んだ。

倣って、俺もそれを口に入れる。

それは全然甘くなかった。

「苦うつ!?!」

カカオ99%ですよ、と彼女が楽しそうに笑った。

Web拍手(2007/02/14)(後書き)

バレンタインらしく。こっちも更新してみようかなど。
(2007/02/14)

風に向かって声を出す。

「あー」

震える声が楽しくて、飽きもせずずっとそうしている彼女を、私はいつものように縁側に座ったままで小さく笑った。

「今日も暑いわねえ」

「はーさんが夏にしておくからでしょー」

震える声はいつもの不機嫌さの欠片もない。

それほどに扇風機で遊ぶのが気に入ったらしい珍しい彼女に代わり、席を立つ。

「ねーまた雪降らせてよ。」

夏の雪

「ふふふ、そんなことしたらお客様が驚いちゃうわ」

え、と彼女が顔を上げて、私の目線を辿る。

次には慌てて立ち上がり、ぱたぱたと逃げていってしまった。

Web拍手(2007/06/18)(後書き)

久々に「モノカキさんに30のお題」よりはーさんです。
毎日暑いんで、雪でもみたいなあと。私の個人的な願望です。

拍手でも夢でも他でもリクエストは年中受付中です

(2007/06/18)

Web拍手(2007/08/06)

庭に水を撒いて、バケツに水を汲んで、蝋燭に火を点す。

ぼうと闇夜に浮かんだそれに、彼女は細長い棒を少し翳した。

闇の中だからなのか。

火が付いたとたんにパチパチと弾けながら、綺麗な光の帯を描き出すモノに、彼女が歓声を叫ぶ。

「はーさん、綺麗！」

「そーね」

ぐるりと円を描く彼女の手元から帯が続き、極彩色の帯を描き出す。

「あんまり振りまわすと危ないよー」

「あはは、キレーっ」

普段は冷静な彼女も、こういうときは年相応になるらしい。

あまり長くは保たない花火が消える頃、私も別の花火に火をつける。

しゅー、ぱちぱち

「きゅーっ」

「気まぐれで買ってきただけだったけど、たまにはこういうのもい
ーなー。」

Web拍手(2007/08/06)(後書き)

夏と言ったら花火と祭りと雷ですね！

でも、今年はまだ打ち上げ花火をまともに見ていません…。

拍手でも夢でも他にもリクエストは年中受付中です

(2007/08/06)

夏雪（前書き）

Jさんリクエスト

夏書

むせかえる湿気と濃い緑の匂いはいつも通りだった。暑苦しい夏の一日をいつも私は縁側に座って過ごす。

日常の雑多な事柄はほとんど彼女がやってくれた。

普段動くことが少ないせいなのかどうかしれないが、食事はほとんど必要ない。

つきあいで食べることはできるし、飲むこともできる。

だけど、それらは必要がなかった。

乾くことも空くこともない。

この体が何でできているのかと考えることがないこともないけれど、面倒になるのであまり深くは考えたことがない。

「ねえ、」

声をかけると奥の部屋から洗濯物を抱えてきた彼女がどさりとそれを取り落とした。

そのまま物音がしないので振り返ってみると、洗濯物をカゴごと落としたまま、あんぐりと彼女が口をあけている。

信じられないと言いたげな彼女の隣には、やはり首をかしげて庭と彼女を見比べる少女がいた。

彼女の隣にいる少女の年の頃は十五、六。

肩口までで綺麗に切りそろえられた黒髪はきついウェーブを描き、揺れる髪で表情がかすかに隠れる。

垣間見える瞳は虚空を望み、そこに白く舞うものを映し出している。

私もいつもの夏の庭へと視線を移し、それから彼女らへ視線を戻

す。

「こんにちは、お嬢さん」

気がついたように彼女が動き出す。

「わ、わわっ」

洗濯カゴに散らばった洗濯物を戻し、それを抱えて奥へと戻ってゆく。

いつもの浴衣に結んだ帯がひらひらと舞いながら奥の部屋へと消えていった。

それをゆっくりと少女の目が追ってゆく。

「これで三回目ね。」

まあ、別に何も聞き出そうとは思わないけど、話したいのなら聞いてあげる」

ここへ来てからまだ一度も声を発したことのない少女だが、なぜここへ来たのかと言うことに対しての葉桜の興味は薄い。

不思議そうな少女の目が自分を捕らえた所で無言の問いに答えてやる。

「珍しかったからよ」

少女が何かを言う前に再び視線を庭へと移す。

空気は間違いなく夏なのに、天から降ってくるのは大粒の白い雪だ。

溶けずに庭の緑をゆっくりと白く染め上げてゆくものを楽しそうに眺めていると、奥から彼女が湯気の立つミルクティーをもって戻

ってきた。

目の前に置かれたカップを持ち、そっと口をつけようとしたが、あまりに熱いのでやめておいた。

温かな飲み物は温かいうちに飲むのが良いのかもしれないが、それでやけどとしては元も子もない。

「ねえ、氷ない？」

奥に声をかけると、しばらくしてしぶしぶと言った様子で彼女が出てくる。

「せっかく温かいのに」

「熱すぎよ。」

「お客様も飲めないでしょ」

別にあたりが冷え込んでいる様子はない。

ただ夏の庭に雪が降っているだけのことだ。

熱いミルクティーに氷を一欠片、しゅううと小さな音を立ててあつという間に見えなくなってしまうた。

いつもどおりの静かな時間は降り積もる雪でさらに静かになってゆく。

誰もいない湖面のように穏やかで波立つことのない少女は何を考えているのだろうか。

「雪が降るのはとても珍しいのよ」

彼女を揺らさないように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

ゆっくり、穏やかに、それはどこまで彼女の中へと届くのだろうか。

「ここはいつも夏だから。」

夏に雪が降るなんて、おかしいでしょう?。」

「まあこれはこれでいいかもね。」

「ここ最近は夕立ばかりで見飽きていたし。」

「あの子にもね、そんなに言うなら夏を終わらせたらいいのになって言われちゃった。」

「でも、どうしてかしらね。」

そうしちゃいけない気がしてるの。」

緑の芝生にしんしんと雪が降る。

さんさんと降り注ぐ夏の陽光をモノともしないそれは作り物めいていて、どこかふわふわと浮いている気分だ。

キン、と頭の芯が小さくしびれる。

それが何の合図なのかわからないまま、私はテーブルに頬をつけた。

「雪は降ってるけど、やっぱり暑いわ。」

夏だから、ね。」

テーブルの木の冷たさが心地よい。

夏にホットミルクティーは合わないな、とぼんやりし始めた思考でゆっくりと考える。

でも、この穏やかな時間は眠りを誘う。

「……………」

まあ、何を話すわけでもないし、別にいいか。
後で彼女に怒られるだろうかと考えながら、ゆるりとした睡魔に身をゆだねた。

* * *

隣で眠ってしまった女性をじっと見つめる。
この女性は不思議と色が無い。
生きていれば、誰もが身につけてしまう固有の色というものを失っていた。

何を話せばいいのか、何から話したらいいのかわからないまま三度も訪れて、そしてまた何も言葉を交わさずに出て行くことしかできない。

「先生は、この仕事に向いてませんよね」

「そうかもね」

廊下をゆつくりと歩いてくる背の高い男を一瞥し、もう一度女性に視線を戻す。

彼女は穏やかに眠っていた。

「私などよりよっぽど、葉桜の方が適任だろう」

「だからといって、患者に代理を頼むのは感心しませんよ」

「でも、君もそう思っただろう？」

葉桜は……向いているよ」

「先生だって向いています。」

ただ、あなたの場合は時間がかかりすぎるのです」

なおも言い続けようとした私の前で、そっと男は女性を抱き上げ

る。

壊れ物を扱うようにそつと抱き上げ、見つめる視線はとても温かく、とても甘い。

意味を感じて、私は眉を顰める。

「……感心しません」

「だから、私には向いていないんだ」

「その方のことをのぞけば、あなたは最高の先生ですよ」

男は黙ったまま、温かな目で女性を見つめたままだ。

彼の最後の患者、葉桜を見つめたまま。

「葉桜は気がついてはいけないんだ。

気がついてしまったら、思い出してしまったら、もう戻れなくなる」

どこへと聞くのは憚られた。

とても切ない、その悲痛な声をきいてしまったのは、聞かなければ良かったと嘆息する。

「戻したくないのはあなたでしょう。」

私にはその方がそこまで弱いようには見えません」

もしもすべてを思い出したとしても、きっと乗り越えられるだろう。

人には生まれながらにその力が備わっているのだから。

「人を見かけで判断するものではないよ」

「先生こそ、心配しすぎです」

口をとがらせて文句を言う私にはただ乾いた笑いしか返ってこなかった。

まったく、これでは埒があかない。

立ち上がり、玄関へと足を向ける。

「報告はしませんよ。」

でも、何かあっても私は知りませんからねっ」

「はいはい、ありがとう」

軽い口調なのに本心から礼を言われてしまったのがわかって、ますます私は眉を顰めた。

「また、会いに来てやって」

「お断りしますっ」

立ち去る私を追いかける様子はみじんもなかった。

彼の前ではああ言ったものの、おそらく自分はまたここを訪れるだろう。

彼女、葉桜とともにいるのはとても穏やかで、ゆっくりとした時間の流れが、時の留まるあの空間がとても心地よかったから。

次に来たときは何か話をしようか。

それとも、これまでどおり何も話さずに過ごすべきか。

思索している時点、近いうちに訪れることがわかってしまって、門を出る前に一度だけその家を振り返った。

みーんみんな。

夏の声と、夏の匂いが、静かに心を満たしてゆく。

それは穏やかで、少しだけ切ない時間。

夏雪（後書き）

「牡丹雪」+「心が折れているのに、気づいてないオンナノコ」で
すどちらが患者かわからない感じ

（2008/02/29）

Web拍手(2008/05/06)(前書き)

気楽な関係

勢いよく広げられたタオルがパンと音を鳴らす。

風にはためく色とりどりの衣服をぼんやりとみていたら、なんだか眠気が襲ってきて。

大きな欠伸を一つ。

「はーさん、せめて隠してよ」

「んー？」

「いーじゃん誰もいないし」

「あたしがいるでしょ」

不満そうな彼女に笑いかける。

「気を遣わないで済む関係っていいわよね」

複雑そうな彼女はいつものように息を吐き出した。

「少しは気を遣ってください」

「あ、じゃあ、珍しくお茶淹れてあげるっ」

名案とばかりに立ち上がると、彼女が慌て出す。

「それはいい！」

「気持ちだけでいい！」

「充分！」

「先生がいいお茶葉もってきてくれたわよね」

「だ、だめ！」

「もったいないからやめてーっ」

私が淹れると全部駄目になる、と騒ぎ立てる声が楽しくて、浮かれながら台所へはいる

「んーと、このあたり？」

「きゃーっ！」

気を遣わなくて良いから大人しくしててっ」

「あ、水羊羹発見。

これ食べて良い？」

手にした水羊羹ごと追い出され、笑いながらいつもの場所に座る。

「あーお茶淹れないと」

「はいっ」

慌てて出された割に、お茶はいつもどおりに美味しかった。

Web拍手(2008/05/06)(後書き)

たまにはっつーか最近Web拍手を更新していないことに気がついたので。

五月のよく晴れた快晴の日はとても好きです

昼寝したくなるぐらい好き(仕事しろ)

気を遣わなきゃいけないのはわかっているけど

気を遣わずに素でいられる人がいるのはとても有難いなーと思う今

日頃の事です

(2008/05/06)

はじめまして（前書き）

うらやんで、それで終わり？

はじめまして

ミンミン蝉とつくつくほうしの織り成す夏特有の合唱でぼんやりと目を覚ます。

先程までそれを子守唄代わりにしていたはずだが、それによって目が覚めたのも確かだ。

矛盾しているようでも、真実なのだからしかたがない。

「はーさん、はーさん、」

とてばたと廊下を走る音に目を閉じる。

そちらを見なくとも、白地に薄青のラインが川のように入った浴衣を着て、くしゃっとした紐を後ろでリボンみたいに結った彼女の姿が瞼に浮かぶ。

いつも思うのだが、あの帯はよく解けないものだ。

「あ

何かに酷く驚いたような声を上げ、立ち止まる気配に片目だけを開いて、顔を微かに向ける。

彼女の走り去る姿がすぐに視界から消え、酷く億劫に体を起こした。

「あんたもいい加減に起きなさいよ」

自分と並んで縁側に寝そべっている男に声をかけたが、彼はぴくりともしない。

起こすのも面倒なので、彼を放って庭へ目を向ける。

一向に飽きる様子もなく、鳴き続ける蝉がどの木にいるのか検討

もつかないので、探すつもりはさらさらない。

「うるせえ」

「馬鹿ね。」

「これが日本の夏でしょ」

舌打ちしてようやく起き上がった男はひどく不機嫌だ。

くすりと笑ったところで、彼女がいつものようにテーブルに汗をかいたグラスを二つ置く。

一見、どちらも同じに見えるし、普段通りならばそのはずだ。

透明感のある二つのグラスのうち、自分の側のグラスは気持ち多めに氷が入っているような気がする。

「蝉を」

溶けた氷がグラスの中で涼しそうに騒ぐ。

惹かれるままに口へと運ぶと冷たさが喉から胃の辺りに滑り落ちるのを感じる。

「おい」

一向に見向きもしない私をいらついた声と呼ぶ。

「あこよ」

別に何を気にするでもなく返すとますます不機嫌になる。

この男は見た目よりもずっと子供っぽい。

「喉渴いてるでしょ」。

飲みなさいよ」

勧めてから、私もまたグラスを傾ける。

彼は不満げにしながら自分のグラスに口をつけ、すぐにテーブルへ戻した。

「あなた、蝉を羨ましいと思ったことあるか？」

わけのわからないことを言う。

「ない。」

あなたはあなの

すぐに答えは返されなくて、その間はただ二人で庭を見ていた。

西の空がうつすらと色づき、ヒグラシが鳴き始めると、また彼が問い掛けてきた。

「悩みとか、なさそーだな」

失礼な。

反論しようと思ったが、少し考えかけてやめた。

悩み事何かを考える行為自体が面倒だ。

代わりに別のことで報いることにする。

「悩みすぎるとハゲるわよ」

「っ、うるせえ」

心辺りがなくても、かすり傷ぐらいはつけられたらどうか。

クスクスと笑っていたら、そっぽを向かれました。

視線をうつし、再び夏の夕色に染まる庭を眺める。

「どうして蝉が羨ましい、なんていうの？」

何かを、誰かをただ羨んで、それが得られるわけもなく。

ただ上辺だけを見て、羨むというのなら、これほど愚かなことはない。

「人と他の生き物では時間の流れが違うそうよ」

「人間にとってはたったの一日としても、蝉にしてみれば、それは何十年も経っているかも」

「同じ時間としても、何も知らずとせずただ羨むのはその生き物に対して失礼だわ」

縁側から庭へ降り、一本のクヌギの下へ行く。

しゃがんで手にとると、それは弱々しくジジジ、と鳴いた。

たもとに入れっぱなしだった袱紗を取り出し、乗せてやる。

しかし、蝉はそれっきり鳴かなかった。

縁側へ戻り、蝉を寝かせた袱紗をテーブルに乗せる。

「騒ぐんじゃないか？」

誰が、とも、何がとも言われなかった。

「そのときはそのとき」

「適当だなあ、おい」

蝉を見詰めたまま、思うままを舌に乗せる。

「羨ましいとか考えるのはいいのよ。

問題はそれからどうするか」

「それから？」

「あなたは羨んで終わるつもりなの」

息を呑む音に口元が綻ぶ。

「次は間違えちゃだめよ」

次に顔を上げる頃には、彼の姿はなかった。

すっかり動かなくなった蝉を人差し指の爪の先で軽く突く。

「やめなよ、はーさん」

奥から姿を見せた彼女が咎める。

「お墓でも作ってあげようか」

止められるかと思っただが、返答はなかった。

夕日に染まる彼女の横顔はとても淋しそうだ。

「今度は遊びに行こうか」

「私たちのことなんて忘れてるよ」

「そのときは初めまして、でいいじゃない」

彼女の頭に手を置き、ゆっくりと撫でる。

「聞き忘れたことがあるの」

私を見る彼女の目が不安げに揺れる。

「羨ましいって、どういうことか、私にはよくわからない」

「だって、私は私で、他の誰でもないし、他の誰かになりたくもない」

そういう風に考えるのは変なのだろうか。

「他の誰かになりたいって、どういう気持ち？」

こちらを見る彼女が眉根を寄せて、不機嫌になる。

「はーさん、本気で言ってるの」

「うん」

素直に頷くと、いきなり彼女は走り去ってしまった。

「え、何怒ってるの？」

「知らないっ」

時々あることなので、私は降りてくる夏の闇色に目を向け、そのまま目を閉じた。

あれだけうるさかった蝉の声は何処に消えてしまったのか。別の虫の声にまどろむ。

「たまには、初めましてとかって、挨拶したほうがいいのかしら」

彼女が怒っていたのも忘れて聞いたら、とても複雑そうな顔をされた。

はじめまして（後書き）

ピクトコミで死にそつです。

（2008/06/11）

秘めごと(前書き)

必要な嘘もあるんじゃない？

秘めごと

その日はいつものように夏真っ盛りで、いつものように晴れ渡っていた。

ただひとつ違うことがあるとすれば。

「和製オルゴール？
いつの時代よ」

奥の部屋から彼女が持ち出してきたのは、かなり時代がかった代物だ。

「蔵を片付けたらでてきたの」
「へえ、倉なんてあったんだ」
「……はーさん」

彼女が呆れているのはいつものことなので放っておき、特徴的なその箱を手にする。

「他には何か一緒になかった？
穴の開いた巻紙とか」
「探してみる」

彼女がいなくなった直後、玄関のいつものチャイムが鳴った。

「……あ」

声をかけようとして止め、仕方なく腰を上げる。

「はいはい、今行きますよ〜」

そう広くはない家だ。

縁側から玄関にはすぐに着く。

(本当は庭から行くほうが近いのだが、それをやると彼女がいい顔をしない)

開け放たれた玄関から家の中へと風が通り抜けてゆく。

その道筋にいた私は立ち止まり、目を閉じてやり過ごす。

混じる微かな香は何だろう。

「夏みかん？」

「あつたり〜」。

流石は「さん、食い意地張ってる〜」

玄関先で大人しく待っていた青年は片手に提げたコンビニ袋を軽く持ち上げてみせる。

「……篠田、なんのつもり」

「こないだのお詫び、かな」

一向に家へ上がろうとしない男を前に面倒な言葉と背中を向ける。

「今取り込んでるから、水ぐらいしか出せないわよ」

歩きだし、着いてくる気配もないから立ち止まり、首だけを向ける。

「さっさとしなさい」

彼はひどく驚いた様子だったが、すぐに破顔した。

縁側の指定席に戻ると、すでにお茶が出されている。
わざわざ戻ってきて、用意してくれたらしい。

「いい子だな」

「そうね」

ガサガサと袋から取り出した夏みかんはさっさと取り上げられてしまう。

彼が手にするものからして、おそらくは剥いてくれるのだろう。

大人しく待つことにしたが、やることのないのはつまらない。

「あの子が淋しがるわね」

ふとそれを口にしていた。

「そうか？」

嫌われてると思ってたけど

「嫌ってなんかないわよ。」

結構好かれてるじゃない」

部屋の隅を指し示すと、彼は目を見開いた。

「わざわざ蔵の掃除をして見つけてくれたのだから、感謝したげな
さっ」

恐る恐る手にした彼は、共にされていた紙をセットし、ゆっくりと回し始める。

夏の庭に穏やかなオルゴールの音が重なる。

ひととき、蝉も声を抑え、だがすぐに音を合わせる。

両目を閉じて、しばし聴き入る。

「よくこんなものがあつたな」

「そうねえ」

正体の知れない飄々としたこの本当の主を思い浮かべる。

「古いものって好きだわ。」

「気持ちが穏やかにならない？」

複雑そうな顔でオルゴールを見つめる男に言葉は届いているのだろうか。

「でも新しいものも好き。」

「ワクワクしない？」

聞き慣れてしまった呆れ声を小さく笑う。

「だからこないだの約束はあの子に内緒よ？」

先日、彼が来たときについ借りてかけてしまった携帯電話。無意識に押した番号と向こう側の懐かしい声。

「いいのか？」

「一応持ってきたけど」

あの時自分がかけた相手が誰なのか、正直よくわからない。

「わざわざもってきてくれたのに、ごめんなさいね」

「使うか？」

申し出を今度は直ぐに断った。

「かけたい相手もないし、どこにかかるかわかったものじゃないわ」

「こないだのは？」

「知り合いだよ」

「知り合い、か。」

「ね、じゃああなたが今一番話したい人にかけてよ」

「……………今は俺じゃなくてあんたの話を、」

「チヅルさんとか」

「っ?」

なんでその名前を知っているんだという抗議の視線を受け流し、空に想いを馳せた。

「秘めごとは秘めたままのほうがいいこともあるわよね」

彼がいなくなったすぐあとで、不安げに彼女が私を呼ぶ。

「はーさん」

「なあに、夕飯なら煮込みハンバーグがいいな」

少しばかりの間のおとで彼女は頷き、台所へと消えた。

自分しかいなくなった部屋の縁側で、引き寄せたオルゴールを奏でる。

ゆっくりと流れる音は温かさがあって、郷愁を強くする。

「あれは、誰？」

口をついてでた言葉に自分が一番驚いた。
考えるのも面倒だったはずなのに。

(思い出すのも面倒なのに)

目を閉じて、夏を感じる。

蝉の騒々しさが今は有り難いと思った。

……重症だ。

秘めごと(後書き)

書いてる間に何か見失った。

(2008/06/25)

鬼（前書き）

得体の知れないもの

鬼

庭に生える緑の木々をただぼんやりと眺めていた。空は高く蒼く、視界から陽射しを遮るように白い雲が流れる。

いや、これは雲じゃないただの白いタオルだ。後ろできゅっと結ばれ、頭が圧迫される。

相手に何か抗議しようかとも考えたが、なんの言葉も浮かばないので息を吐くだけに留めた。口も鼻も抑えられているわけではないので、命に危険があるわけでもない。

しばらくして、相手から驚きの声があがる。

「え、それだけ？」

それは初めて聞く声ではない。

「何がしたいの、あーちゃん」

「あーちゃんいうな、はーさん」

「……細かいこと言うな」

タオルを取らずに、彼のいる辺りへ顔を向ける。

「お茶」

「ほらよ」

手渡されたのはペットボトルで、開けて口にしてみたら、フロ-

ズンオレンジだった。

氷の破片が口の中でさつととけ、一時暑さを忘れさせてくれる。

「……変なオナナだなあ」

「ありがとう」

「褒めてねえよっ」

「飲み物とつてくれたでしょう」

少しの間をおいて、また彼は言った。

「変なオナナ」

声にはただ困惑だけがあって、それが妙に笑える。

「朝陽、今日のお茶受けはなに？」

少しして、タオルが取り払われた。

同時に吹き付けてきた風に雨の気配を感じる。

「雨が降るから、泊まっていきなさいね」

「……」

「夕食は何がいい？」

「私は冷し中華」

後ろから抱きしめてきたことに少し驚いた。

彼はそういう触れ合いを恐れていると思っていたから。

「はーさんは、俺が恐くねえの？」

「なんでそんな面倒」

「面倒？」

「恐いとか恐くないとか、考えるのが面倒だわ」
「……変なオナナ」

確かにそうかもしれない、と小さく笑いが零れる。

「少なくとも、自分で自分を怖がっているような人を怖がるのは果てしなく面倒だわ」

体が離れたので、首を巡らせ、顔だけを向ける。

彼はひどく憤慨した様子で、言った。

「俺が、俺を、怖がってるって？」

自覚はあっても認めたくはないのだろう。

気持ちはわからなくもないが、同情も同意もするつもりはない。

「影鬼って知ってる？」

「影踏み、だろ」

馬鹿にしているのかと怒りもあらわな少年を笑う。

「同じことよ。」

得体の知れないものを旧くから人は畏れを持って、鬼と名付けたの。

つまり、影鬼はその名残ね」

常についてまわる闇を畏れた。

「鬼ごっこも多分同じことよ」

縁側を降りて池へと向かう。

「朝陽にとっては私のが鬼みたいなものじゃない？」

「怖くなんかねえよ！」

少しの間を置いて叫ぶように返され、私はまた笑った。

彼がいなくなってから、彼女がポツリと零した。

「はーさんは鬼じゃないよ」

強く意思を持つ言葉が温かく、胸に染みだ。

鬼（後書き）

満員電車で倒れかけた。都会は怖いね。

最近遙か4やっってるから影響が文にでてるね。

前半はデイズニートシーで書いてた。あそこは並ぶためにいくようなものだね。

（2008/07/01）

雨(前書き)

どんな雨もいつかは止むと、信じてる

雨

ざあざあと滝のように流れる雨をいつもの縁側で見ていると、彼女に怒られてしまった。

理由はおそらく、雨が降っているのに縁側のガラス戸を開け放していたからだろう。

かすかに吹き込んでくる風は適度な湿り気を帯びていて、心地よい。

「風邪引いても知らないんだからねっ」

「はいはい」

仕方なくガラス戸を閉めるがなんとなく離れがたくて、そのまま外を眺めていた。

時折吹き付ける風はガラス戸に雨粒を叩きつけ、その雨だれは予測不能な軌跡を描いて落ちてゆく。

じつと何時間眺めていても予測できないそれをぼーっと眺めていたら、上から大きな白いタオルが降ってきた。

「わかってないようだけど、ずぶ濡れだよ。

はーさん」

それは彼女の声ではなく、外に出かけたときに偶然会った青年のものだ。

まさか、こんなところに来るようには見えなかったので驚いて確認しようとしたら、わしわしとタオルの上から髪を乱暴に拭かれてしまう。

「わ、わわ、？」

一瞬だけ抵抗しようか迷ったものの、意外に気持ちいいのでやめた。

じつと終わるのを待ちながら、自然と目蓋が重くなってくるのは何故だろう。

「……無防備すぎ……」

「んん？」

何か言った？

「俺、もしかして信用されてる？」

もしかしても何も。

「面倒見がいいのは知ってるしね」

彼と出会ったのは雨の中の小さなバス停で、都会というほど都会でなく、田舎というほど田舎でもなかった。

簡易的に付けられた小さな屋根の下、私は一人でベンチに座っていた。

彼女と些細な口論になり、置いていかれたのだ。

あの時は彼の持っていたタオルを借りて、自分で拭いた。

「ミーニャは元気？」

あの時の彼は小さなずぶ濡れの子猫を連れていた。

腕の中で雨に怯える子猫はとても澄んだ目をしていた。

ちなみに、名づけは実は私だ。

拾ったばかりだというので、勝手に付けた。

「あ、ああ、そういえば、あんただったか」

手が止まり、ようやく彼を見上げようとしたが、彼はすぐに膝を立てて座って俯き、少し長めの髪が目元を覆い隠してしまった。

「あいつは逃げたよ」

「一人立ち？」

「……かもな」

齒切れの悪い言葉に首を傾げる。

何かを問おうとしたが、彼女がお茶を運んできたので口をつぐんだ。

この香りはホットミルクだ。

温かな湯気を立ち上らせているそれを口元に持ってゆき、ふうふうと冷ますために息を吹きかける。

湯気を通り抜けた息はかすかに窓に当たり、少しだけ曇らせた。

窓の向こう側で落ちる雨だれを再び見つめながら、何度もカップに息を吹きかける。

とろとろと落ちてゆく雨だれは時間の流れまでもゆったりとさせるようだ。

「この間も、そうだったな」

急にそういつから振り返ったら、彼はじっと私を見ていた。

「雨がそんなに珍しいか？」

「そうねえ、こういう長雨は珍しいわ」

「ふーん」

彼が黙ると、辺りはまた雨の音に包まれる。

両目を閉じると、静かな雨の音だけが聞こえて、世界はひどく透明な水の中にあるように感じられる。

それは私だけのようで、彼は暗い心を漂わせている。

雨よりも鬱陶しい。

「ホットミルクは嫌い？」

「別に」

「温まるわよ」

返答は返ってこない。

考え込んでいる様子の彼を放っておいて、またガラス戸に視線を戻す。

飽きもしないで降り続ける雨の音を飽きもせず眺め続ける。

そういえば、とカップをソーサーへ戻して、彼の視線に気が付いた。

何故見ているのか問おうかとも思ったが、その目が全ての問いを拒絶していた。

生きているのに死んだような目をしているから、私はまたガラス戸へと視線を向けた。

「雨は嫌い？」

「別に」

律儀に返答してくれる様子に苦笑する。

風がガラス戸に雨を強く叩きつけ、それに驚いて顧みる。

風が少し強くなってきたかもしれない。

「どんな雨もいつかは止むのよ」

「知ってるさ」

「今だけは、全部を雨が持っていていてくれる」

ざざざあと滝のように強く流れ落ちる雨は私の声を彼に届けるだろうか。

両目を閉じて、私は雨の声を聞く。

「今だけは、世界の音の全てが雨になるよ」

心の状態で雨を感じる音は変わる。

彼に聞こえる音はきつと、淋しいと、悲しいと泣く音だ。

彼女を恨むことも出来ないでいたから、こんなところまで来てしまったのだろう。

いつのまにか一人でガラス戸の向こうを見つめる私の隣に、彼女が立っている。

「はーさんは、」

そこまで言いよどむのは、答えを恐れているからだ。

ガラス戸越しに小さく笑いかける。

「今夜はきつと空気の澄んだ夜になるわよ。」

久々に、カードゲームでもしよっか」

「っ！」

うんっ。

じゃあ、おむすび作っておくねっ」

満面の笑顔になって台所へ消える彼女の後姿を、じっと見送る。

「この居心地がいいのは、彼女のおかげでもあるから。」

「じじじいよ」

誰にもなく呟いた声は、やけに強く耳に響いた。

雨（後書き）

久々にPCで書いたら、全体的に白く……。スランプとか以前の問題のような気がしてきた。

（2008/10/22）

Web拍手(2008/11/24)(前書き)

好きなものは好きだから

Web拍手(2008/11/24)

砂嵐のような音で目を覚ます。

そこにあるのはいつもの青い空と白い雲と緑の庭だ。

「らーららら らーらーらー」

次いで聞こえてくるのは彼女と誰かの歌う声。

とても楽しそうな彼女の様子に嬉しくなって、もう一度目を閉じる。

「らーららら らーらーらー」

「うん、上手上手」

パチパチと軽い拍手と彼女らの笑い声。

「おふたりさん、唄が好きなのね」

慌てて振り返った二人を寝そべったまま笑う。

「どうぞ続けて。」

「いい夢が見られそう」

そのまま寝ようと思ったんだけど、なんだか空気が変わったので、薄めを開けてのろのろと起き上がる。

ずりずりと畳を這いずって、彼女らの傍へ近寄って、彼女らの頭に両手を置く。

客の少女は複雑そうな顔をしていた。

「私、唄なんて好きじゃない」

「じゃあ知らなかったんだ。」

好きじゃなきゃ、そんな風に歌えないわよ」

Web拍手(2008/11/24)(後書き)

ぷち落ち込み中だったんですが、暖かいメッセージに救われました。
ありがとうございます！

もう少しだけ、頑張っていこうと思います。

(2008/11/24)

Web拍手(2009/01/27)(前書き)

猫の夢

Web拍手(2009/01/27)

ふかふかの寝床に横たわり、ほあほあの手のひらに挟まれ、至福に包まれ、なーと啼く。

「いい天気ね」

柔らかな手でそつと撫でられる感触が心地よくて、くああ……と欠伸が出てくる。

「あ……ふ……っ」

彼女も大きな口を開けて、目に小さな涙を湛えてる。

何か悲しいの？

「んー？どーしたー？」

僕が啼くと、彼女は喉を撫でる。
ごろごろごろ。

彼女の手は気持ちがいい。

「はーさんー？どー？」

遠くから声が聞こえて、彼女がクスリと幸せそうに笑った。

その手で僕を抱き上げる。

「探してるから、一緒に行こうか」

「なー」

「みるく、あつたか聞いてみよう」

「なうー」

「あつたかいなー、オマエ」

そつと撫でる優しい手に僕はそつと頭を摺り寄せた。

「あつたかいなあ」

温かな声に包まれて。
僕は平和の夢を見る。

Web拍手(2009/01/27)(後書き)

猫を飼ったことはないですけど猫視点
猫好きだけど、飼うなら犬がいい

「自由気ままな」猫が好きです

単に暖かい話を書きたくなったのです

(2009/01/27)

花火（前書き）

テーマ「光と闇」

花火

風を切る音を聞きながら夜空を見上げる。

ひゅると昇ってゆくのと破裂音が少しのラグの後で起きるのを聞きながら、私はうちわを揺らした。

昼の暑さを忘れる湿やかな風が首筋を通り抜け、夏の夜に涼しさを届けてくれる。

まあ、蒸し暑いのが消える訳じゃないんだけど。

縁側に直接置いておいたグラスの氷が溶けて、カランと音を立てる。

浴衣姿の世話焼きな幼い少女は珍しく隣に座って、光弾ける夜空を食い入るように見つめていた。

「たまやー、って何？」

「江戸時代の花火屋さんの名前ね」

汗をかいたグラスを持ち上げると、またからりと澄んだ音色を響かせる。

「かぎや、は？」

「それも花火屋さん。」

「あ、また上がるわよ」

「あっ」

慌てて少女が空を見上げると、丁度夜空を大輪の華が彩った。光を移す少女の瞳は目一杯に開かれて、こぼれ落ちそうだ。

クスリと笑いながらグラスを傾ける。

今日の飲み物は冷えたレモネード。

「たまやさんもかぎやさんもがんばれー」

幼い少女の言葉に應えるように、今度は二つの華が咲いた。

花火（後書き）

久々にはーさん。

やっぱり夏の話って書くの好きだなあ。

（2009/01/17）

面倒(前書き)

テーマ「面」

面倒

意識までもっていきそうな抜ける蒼に手を翳す。

そこを無粋に横切る白雲を見て、私はそのまま手を下げた。

緑の木々と涼しげな石庭が目の前に広がる。

辺りは蝉の合唱と湿気で余計に暑さがいや増す。

「だるー」

じつとりと肌に吸い付く浴衣の中に風を入れても全然足りない。

夕暮れに夕立でも降れば、少しは和らぐかもしれないが、今蒸し暑いというほうが問題だ。

ぐったりと縁側に倒れると、木の床はひんやりと少しの冷たさを伝えてくれた。

「今日はおやすみー」

「またそーゆーことを……」

「こんな日に相談なんか受けてらんないよ」

「お・し・ご・と・ですっ」

「め・ん・ど・う・ですっ」

区切って強調する小間使いの幼女にきっぱりと言い返すと、彼女の頬がぷくりと膨らんだ。

そのまま彼女が踵を返す音と共に涼しげな音色が響いて、慌てて起き上がる。

「え、そのフロートはっ？」

「お仕事しない人にはあげませんっ」

無情に遠ざかる冷たい飲み物を少しだけ目線で追いかけたけど、
蝉の声がことさらに大きく聞こえて、ぐったりと私はまた縁側に倒
れた。

「追いかけるのも面倒ー」

夏は暑いものだし好きだけど、たまには手加減して欲しい。

面倒（後書き）

面、で最初に浮かんでたのがはーさんて。
しかも「面倒」て。

なにかこう人格を疑われそうなネタ。

面倒事は好きじゃないけどちゃんとやりますよ、はい。

（2009/02/08）

Web拍手(2009/03/13)(前書き)

春眠

Web拍手(2009/03/13)

柔らかな午後の日差しを浴びつつ、若芽の揃う芝生の上で両腕を頭の下において枕にし、惰眠を貪る。

穏やかな春の午後、大学近くの公園の他の場所にはもっと人が多い。

ただどこには不思議と誰も寄り付かない。

まあ、公園内とは言い難いからだと、俺は小さく苦笑した。

風が桜の香りと傍らで気持ちよさげに眠る女の寝息を届けてくる。

……女？

何気なく見た姿を慌ててもう一度確認する。

断っておくが、俺には彼女なんていない。

白すぎず、黒すぎず、化粧もしていない肌はまだきめ細かで瑞々しく、春より夏祭りのほうが似合いそうな浴衣姿で、解かれた長く真っ直ぐな黒髪が青葉と重なる。

っ！

小さなクシャミされて慌てる。

寒いのだろうか。

着ていたジャケットを脱いで、女の肩口にかけてやる。

最中ひらひらと落ちてきた薄紅の欠片が女の鼻先におちる。

っ！

合点のいった俺は安堵して桜の枝を見上げた。
女が誰なのかわからないが、こんな花見も悪くないかもなと小さな苦笑を零した。

Web拍手(2009/03/13)(後書き)

一週間一更新落としそうなので(そんな理由か

最近女性視点とか第三者視点が多いので、たまには男視点ではーさ

ん(結局はーさん

おもてなしを書こうとしたんですが、桜を見ていたら花見になり、
はーさんが寝てしまいました

(2009/03/13)

Web拍手)2009/04/03(前書き)

さくらとさかな

Web拍手(2009/04/03)

ばたばたと団扇を揺らす。

その先にあるのは七輪で、焼き魚が美味しそうな香りをさせている。

「はーさん、もっとちゃんと扇いで」

風向きとは別な方向にいる浴衣姿の幼い少女が口を尖らせる。

「はいはい」

返事をしつつも気が向かないので、私は変わらない速度で扇ぎ続ける。

「はーさん」

「……っーかさ、なんで花見で焼き魚？」

視線を上げると、塀の向こうからよっきりと満開の桜の枝が庭先に突き出している。

突き出すわけ、ないんだけどなーと心中で呟くに留める。

「ジンギスカンしているところがあるんだから、焼き魚もいいですよー」

わけのわからない理屈を捏ねる少女を水に、私は扇ぐ手を止め、くわあと大きく欠伸した。

「はーさんっ」

「焼き魚より、ほら、たまにはお茶立てるとか」

彼女の怪訝な目がこちらをむいて、できるのか、と物語る。

「できないよ。」

でも、ほらせっかくの桜だし、花見だし」

「たまには風流にとか」

「はーさんが？」

すごく失礼なことを言われた気がするけれど、煙に別な香りが混じったこともあってスルーしておく。

「焼けてるよ」

「え？……あ！」

花も良いけど、この桜の下で普通にお茶をしたいなあと思ふのを辞めた団扇を口元に持っていき、私は小さく嘆息した。

「おなかですいたっていったの、はーさんなんだけど」

「そうだったけ？」

Web拍手(2009/04/03)(後書き)

最初は突発ビタミンZにしようかと思ったのですが
金曜日だし(一次創作更新曜日)

結局はIさんになりました。

(2009/04/03)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5917h/>

夏影 -なつかげ- 【短編集】

2010年10月15日21時38分発行